

るため、二重鉢の処理をして土壌の厚さを当初の倍の約40cmとした。その結果、処理をしなかった株は11月中旬に葉の幅が細くなり生育がますます悪化したのに対し、処理したものは葉色が濃くなり、生育が良くなった。8月上旬に調子が悪くなったのは根づまりが第一の原因であることがわかり、これは市川らの指摘を支持する結果であった。

一方、市川らが「春に展開した葉は、8月下旬から枯れ始め、11月上旬に大部分が枯死する」としているのに対し、本調査では完全に葉が枯死するのは果実をつけた株のみであり、果実をつけなかった株は11月中旬になっても葉が枯れないことが観察された。また、市川らが「種子からの発芽と思われる新生個体は確認できなかった」としているのに対し、本調査では8月の時点で実生と考えられる株が5株見られた。さらには、市川らは開花が7月上旬からとしているが、本調査では4月下旬には開花している。以上のような相違は栽培生育条件によるものと考えられるが、今後詳細な比較調査が必要である。

## 2. イトモについて

イトモの保存栽培に関する調査報告は、今のところ確認できていない。

本調査で確認したイトモの生活環は、春(4月頃)に水底にある殖芽が生長を開始し、初夏(6月頃)には花を咲かせ、夏から秋(7月~8月)にかけて果実が成熟し、晩秋(10月下旬)に殖芽ができて冬の休眠に備える、というものであった。水面で咲いた花以外にも水中に膜に包まれた一見つ

ぼみのような花がたくさん見られ、水面で咲いた花の数以上の数の果実が結実した様子だったので、角野(1994)がいうようにしばしば水中で自家受粉して結実すると考えられた。

## まとめ

ヤマトミクリについては、市川らの報告どおり、土壌の深さは30cm以上で栽培するのが望ましいと考えられるので、今後はこの条件で保存栽培を行う。また、市川らが触れていないヤマトミクリの実生による増殖については、今後の課題である。

イトモについては、水底には厚さ数センチの埴土が堆積し、水深およそ50cm、井水が常時オーバーフローしているという現在の環境で生育が良好なので、このまま保存栽培を続ける予定である。

## 謝辞

本調査を行う機会を与えてくださった広島県備北地域事務所建設局の上野正和主任および様々な情報をいただいた(株)LAT環境設計事務所の青木晋氏、(財)広島県環境保険協会和田秀二氏及び(財)広島市農林業振興センターの濱谷美佐子主任技師に御礼申し上げます。

## 引用文献

市川喜美代・西上大輔・佐藤治雄・森本幸裕 2002.

ヤマトミクリの群落復元のための基礎的研究.

日本緑化工学会誌 27(4):574-581.

角野康郎 1994. 日本水草図鑑. 179pp. (株)文一総合出版, 東京.

## 大温室のラン常設展示コーナーにおける ナメクジ被害防止対策

高井敦雄・梶原芳信

大温室に常設展示しているランのコーナーでは、年間を通じてナメクジによる被害が多い。特に中南米のランコーナーの被害が著しい。当初はナメクジ駆除剤の散布により対応していたが、なかなか被害の防止にまでは至らない状況であった。そこで、ナメクジが銅を嫌う性質

を利用して、オンシジウムの花茎に銅線を処置することで被害を防げるか試行した結果を報告する。

### ◎1回目の方法

銅線で輪を作り、花茎の下部に引掛ける手法を用い(写真1)、銅線を処置した株と何も処置していない株を数日間置いて比較を行っ





写真2

た。  
**結果及び考察**

処置を行った株と何も処置していない株で歴然とした差が出た(写真2)。処置を施した株においては、銅線の掛かった箇所より上部の花や蕾は被害を受けなかったが、それより下部では被害を受けていた(写真3)。この結果から銅線による防止対策は有効と思

われた。しかし、株に付けてある支柱や周囲のシンゴニウム、タニワタリなどの葉がオンシジウムの花茎に接触している株においては、それらを伝って来たと思われるナメクジによる被害が出た(写真4、5)。また、処置した株の中には銅線の上を這った形跡があり、被害を及ぼした株もあった。これは、ナメクジとの接触面積が小

さいことが原因と思われた。

**◎2回目の方法**

1回目の結果から、引掛ける手法ではなく、銅線を数回巻いて接触面積を大きくする方法を採った(写真6)。

**結果及び考察**

この方法により、被害がほとんど出なくなった(写真7)ことから、ナメクジの被害はほとんど防げると思われた。しかし、銅線の巻き付けや取り外しにはペンチが必要で手軽に処置することは容易ではないことから、多くの株に処置するには現実的ではない。

**◎全体の考察**

2回目の方法は有効ではあるが容易ではないことから、手で容易に曲げられる細い銅線の使用も考えたが、接触面積の減少を伴うことから、効果は劣ると思われる。アルミ箔のような銅の薄板の利用が、ナメクジとの接触面積の減少を伴わず、かつ簡便な方法として有効と思われる。しかしながら、この手法も前述した他の植物との接触による被害は防げないことから、周辺の観葉植物の整理も行う必要がある。また、ランの種類によっては、銅板の処置が難しいものもあることから、ナメクジ駆除剤の使用も引き続き必要であろう。



写真3



写真4



写真5

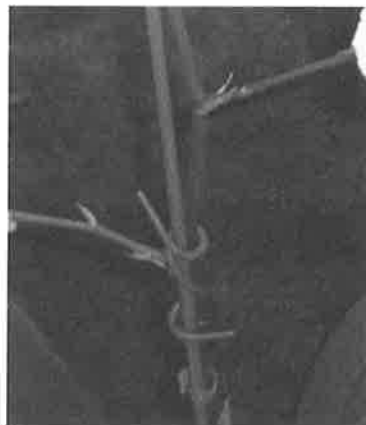


写真6



写真7